

変貌する北アフリカ —ヨーロッパ・アラブ・アフリカの結節点—

鹿児島県立鶴丸高等学校 脇田 政人

1. はじめに

石油、天然ガスをはじめ、多くの鉱産資源に恵まれるアフリカ大陸は、資源獲得を目論む先進工業国やBRICsの積極的な援助や投資の結果、着実に経済成長を遂げつつある。また、10億を超える人口は、金融危機で世界的に需要が冷え切った今、新たな巨大市場として大きな存在を示している。

そのアフリカにあって、将来的に北アフリカ諸国が果たす役割は大きいであろう。なぜならば、地理的には「アフリカの玄関口」に位置すること、歴史的にはイスラーム世界にありながら、ヨーロッパとも関係が深く、西洋社会との「架け橋的存在」になり得るからである。

同時多発テロやイラク戦争、また石油価格高騰やドバイショックなど、わが国においても新聞やテレビでイスラーム世界が話題に上がる機会が増え、また経済的な面でアフリカに対する評価が高まりつつある今、北アフリカの地誌について学ぶことは大変有意義であると考えている。

この單元では、まず、北アフリカ地域に今もなお絶大な影響力を持つイスラームと人々の生活の関わりを学習する。次に、ヨーロッパの周辺地域として経済発展を続けるマグレブ諸国の現状を述べる。「伝統的な地

域性」と「現代の経済発展」という過去と現在の両面を取り上げることで、北アフリカ地域の現状をより立体的に理解できるのではないかと考える。

なお、国連の定義では、北アフリカの範囲を東はエジプト・スーダンから、西はモロッコ・西サハラにまたがる地域としている。

2. イスラームと生活の関わり

イスラームが北アフリカ全域に伝わったのは8世紀の頃である。教典であるコーラン（クルアーン）がアラビア語で書かれていたことから、同時にアラビア語もこの地域に広く普及した。アラブ人とはアラビア語を母語とし、イスラームを信仰する民族の総称であり、この地域の人口の大部分を占めている（図1）。また、マグレブ諸国には、独自の言語系統をもつベルベル人（アマジグ人）も約1500万人居住し、イスラームを信仰し農牧業を営んでいる。

イスラームの信仰の基礎となっているのは「六信五行」である。六信とはムスリム（イスラム教徒）が信じるべき六つの対象のことであり、五行とはムスリムとして日々の生活で実践しなければならない五つの行動のことである（表1）。断食（サウム）が行われるラマダーン月にアラブ諸国を訪れると、ムスリムでない限り断食する必要はないが、レストランや商店の営業

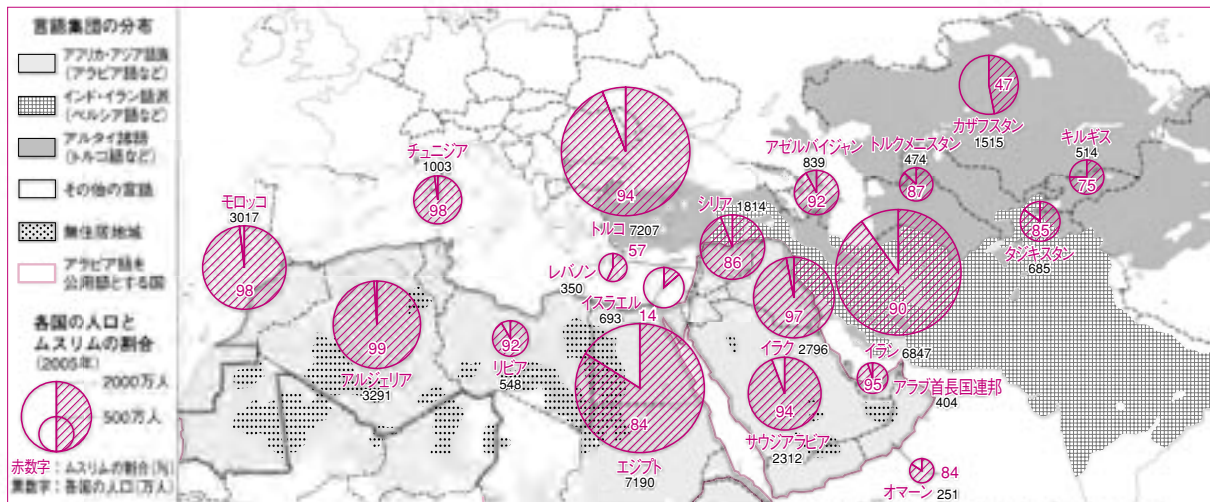


図1 『高等学校 新地理A 初訂版』 p.105

時間が短縮されたり、催し物の内容が変更されたりと、何かと不都合が生じる。この他にも、イスラームにはさまざまな禁忌(タブー)が存在する。食事を例にとってみると、排泄物に触れることの多い左手を使うことや、不浄とされる豚肉を食べることが禁止されている。その他にも、アルコールは飲まない、女性は黒地のベールやチャドルで顔や体を覆い肌を見せない、賭け事は禁止、などのタブーがある(図2)。

ムスリムの信仰のよりどころとなっているのが、

表1 エルサレムで誕生した三宗教
『新詳 資料地理の研究』p.243

	ユダヤ教	キリスト教	イスラーム
成立	紀元前6世紀	1世紀	7世紀
創設者		イエス	ムハンマド
神の名	唯一神 ヤハウェ	唯一神(父なる神・子なるイエス・聖霊→三位一体)	唯一神 アッラー
聖典	旧約聖書	旧約聖書、新約聖書	クルアーン(コーラン)
教義の特徴	厳格な律法主義(モーセの十戒) 選民思想、偶像否定、救世主(メシア)思想	“イエスは救世主である” 使徒ペテロ・パウロらの伝道	神への絶対服従、六信五行を守る、偶像崇拝の禁止



図2 『高等学校 新地理A 初訂版』p.105



▲◎ モスクの構造

図3 『世界の諸地域NOW 2010』p.83



写真1 『世界の諸地域NOW 2010』p.83

モスクである。モスクとはそもそも「ひざまずいて礼拝する」という意味をもち、転じてイスラーム寺院をさす名詞となった。外観としては、ドーム(たまねぎ)型の屋根とミナレット(尖塔)が特徴である(図3)。また、偶像崇拝の禁止を徹底していることから、内部の壁面に人物などが描かれることはなく、アラベスクと呼ばれる幾何学模様を描かれている(写真1)。ムスリムは金曜日になるとモスクに集まり、聖地メッカに向かって、唯一神アッラーへの祈りを捧げる。

イスラームは厳しい乾燥気候の下で生まれ広まった教えである。だからこそ、神への奉仕を重んじ、信徒同士の相互扶助関係や一体感を重んじる点に大きな特色があり、その精神文化は、現代でも脈々と受け継がれているということを理解させたい。

3. 豊かな原油・天然ガス資源

北アフリカは、原油・天然ガス資源に恵まれた地域である。原油については、エジプト、リビア、アルジェリア、チュニジアで生産があるが、とくに、リビアとアルジェリアの産出量が多く、その世界に占める産出量の割合は、リビア2.4%、アルジェリア1.9%となっている。主要な油田としては、リビアのゼルテン油田、サリール油田、アルジェリアのハシメサウド油田、エジェレ油田があげられ、欧米資本によって開発された。両国で産する石油は低硫黄であり、また、欧州への近接性を生かして、そのほとんどがイタリア・ドイツ・フランスに輸出されている。天然ガスについては、アルジェリアの生産量が多く、イタリアやフランス・スペインへ、パイプラインやLNG船を利用して輸出されている(図4)。



図4 『新詳 資料地理の研究』p.249

このようにヨーロッパのエネルギー供給基地としての地位が高まる一方で、石油・天然ガスによる外貨獲得に依存したモノカルチャー経済から脱却できない現状もあることを理解させたい（表2）。

表2 北アフリカ各国の状況『新詳高等地図 初訂版』p.133~136

国名	面積 (万Km ²)	人口 (万人)	1人あたり GNI(ドル)	おもな民族 (%)	おもな宗教 (%)	おもな 輸出品	おもな輸出 相手国
エジプト	100.2	7201	1350	アラブ人 (92)	イスラーム (84) キリスト教 (9)	石油製品 鉄鋼 綿花	インド イタリア スペイン
リビア	176.0	548	7380	アラブ人 ベルベル人	イスラーム (92)	原油 石油製品 有機薬品	イタリア ドイツ スペイン
チュニジア	16.4	1013	2970	アラブ人 (98)	イスラーム (98)	衣類 機械類 原油	フランス イタリア ドイツ
アルジェリア	238.2	3348	3030	アラブ人 (80) ベルベル人 (19)	イスラーム (99)	原油 天然ガス LNG	アメリカ合衆国 イタリア スペイン
モロッコ	44.7	3051	1900	アラブ人 (65) ベルベル人 (35)	イスラーム (98) キリスト教	衣類 機械類 魚介類	フランス スペイン イギリス

4. チュニジアの経済発展と課題

チュニジアは温暖な気候に恵まれ、古くから農業の盛んな国である。国土に占める耕地率は30%を超え、小麦、大麦、柑橘類、オリーブ、なつめやしなどを産する。また、鉱産資源としては燐鉱石のほか、少量ながら石油、天然ガスも産出する。このような背景により、かつては輸出品の大部分が一次産品であった。しかし、脆弱なモノカルチャー経済から脱却すべく、1970年代初めに計画経済から市場経済に改めて、積極的に外資を導入したことにより工業化が進み、現在では、繊維・機械・皮革・化学肥料・加工食品などの輸出品が上位を占めるようになった（表2）。

1995年には、地中海諸国で初めてEUとの間に自由貿易協定を締結し、それを受けて、2008年、工業製品に関する関税撤廃が導入された。また地中海に面するアラブ諸国との間でも協定を締結するなど、さらなる経済の自由化を推進している。

チュニジアは観光資源にも恵まれている。チュニス旧市街、カルタゴ遺跡など計八つの世界遺産や、地中海沿岸のリゾート地などには、ヨーロッパ人を中心に多くの観光客が訪れ、観光収入が外貨獲得の柱の一つとなっている。

このように、政情が安定していること、ヨーロッパから近く人件費や物価が安いことを受けて安定した成長を続けるチュニジアは、1人あたりGNIが2970ドル（2006年）であり、アフリカにおいては、産油国を除けば、

アフリカの中でも上位に位置する。

しかし、貿易の8割をヨーロッパに依存しているために、経済状況がヨーロッパの景気の動向に大きく左右されてしまうことや、経済成長に伴う人件費上昇に伴い東欧諸国との競合が高まること、若年層を中心とした高い失業率（約14%、2007年）など、多くの課題を抱えていることにも言及したい。

5. ヨーロッパへの移民、出稼ぎ労働者

マグレブ3国はかつてフランスの植民地であり、現在でも仏語が広く使われている。1950年代、本国フランスでは労働者不足が深刻であったため、マグレブから多くの移民を受け入れた。しかし、石油危機以降は一転して、「移民流入の抑制」と「移民のフランス社会への同化」を柱とした政策をとった。2004年、フランスの公立学校でムスリムの女子生徒のスカーフ着用を禁じた新法が施行され、ムスリムの強い抗議運動が起きた。また、2005年、アフリカ系移民の少年2人が、警察の追跡から逃げる途中で感電死するという事件がパリ郊外で起こった。この事件をきっかけに、移民の若者による暴動が一気に拡大し、非常事態宣言が出されるほど、フランスは一時混乱に陥った。

現在、フランスには推定600万人のムスリムが暮らしている。これは実に全人口の10%を占める。今後もイスラーム世界からの外国人労働者の数が増えることを考えると、さらなる民族間の対立の激化が予想されることにもふれておきたい（表3）。

表3 フランスへの外国人流入人口

国名	1995年 (人)	2006年 (人)	全体に占める割合 (2006年) (%)
アルジェリア	8,400	25,400	18.8
モロッコ	6,600	19,200	14.2
トルコ	3,600	8,300	6.1
チュニジア	1,900	8,200	6.1
カメルーン	700	4,400	3.3
全体	48,800	135,100	100

※アフリカの国のみ

6. おわりに

北アフリカは、文化の壁はありながらも、ヨーロッパとの密接な関係を保ちながら発展を続けてきた。

かつて、日本企業が豊富な資源、安価な労働力を求めてアジアへと進出し、現在では市場として成長したのと同じように、北アフリカも変化していくのであろう。経済のグローバル化は、民族の違いをもとめせず進展していくのである。そのことについても生徒に発展的に学習させたい。